

1. クラシック音楽との出会い

私が初めてベートーヴェンを聞いたのは中学二年の夏休み。

「クラシックの楽曲を聴いて感想文を書け」という音楽の課題が出たからだ。

このことが、私をクラシック音楽やオーディオ機器の世界へと導いてくれたのである。

当時の我が家には音楽を再生する機器もレコードも無かった。そこで近所の音楽好きなオジさんに相談したら、カラヤンの演奏したベートーヴェンの交響曲第5番「運命」とシューベルトの交響曲第8番「未完成」（現在では第7番）がカップリングされたLPレコードを聴かせてくれた。

家具調のセパレート・ステレオに針が降ろされると「ダ・ダ・ダ・ダーン」と「運命」の冒頭の力強い主題が鳴り響いた。

ベートーヴェンは、この4つの音について“かくして運命は扉を叩く”と語ったという。

この言葉と独特なリズムは今でも記憶に残っている。

その後の研究で、この言葉は弟子のシンドラーによるフィクションだとされた。

2. ステレオフォニック

「運命」と「未完成」を聴き終わると、ステレオセットを購入した時に付いていたという「ステレオ録音・体験盤」というレコードをかけてくれた。

こちらは、針を降ろすと、電車や車が左から右に通過する音など、日常生活で聞き慣れた音が、あたかもその場に居るかの様な臨場感で再現され聞こえて来た。

初めての体験に「え、どうして・・・」と、仰天！

その時の私は、蓄音機から聞こえるエジソンの声に首をかしげる犬のニッパー君と同じ心境だったと思う。(笑)

この時のステレオ録音への好奇心が、後に私をカセットデンスケを持ち歩く生録マニアにしてしまう。



3. FM放送とテープデッキ



やがて、我が家にも電器店からステレオセットが届く日が来て、親父さんはジャズ、母さんは歌謡曲、私はクラシック音楽を聴き始めた。当時高校生だった私は、1枚2,000円もするクラシックのLPレコードを次々と買える筈もなく、悶々としていたら、暫くしてNHKがFMの全国放送を開始する計画があるという情報を得た。

当時のステレオセットには既にFMチューナーが内蔵されていたので、直ぐに高音質なクラシック番組を楽しむことが出来た。FMの音はラジオのイメージを変えた。



クラシック初心者の私は FM で聞き流すだけではなく、繰り返し聞きたくなり、親に頼み込んで 7 号のオープンリールを使うテープデッキを買ってもらった。音質重視で 4 トラック 19 cm/s でエアチェックをして、様々な作品を繰り返し聴きこんだ。1 本のテープで何度も録音・再生を繰り返す事が出来る磁気テープは経済的である。

社会人になってからも FM のエアチェックは続けたが、長い曲でも片面に途切れず録音出来る 10 号リールが使えるオープンデッキに買い替えた。私とテープデッキの付き合いは、家庭用デジタル録音システム (PCM プロセッサー+ビデオデッキ) が登場するまで続いた。

4. NHK-FM の問題点

FM 放送をエアチェックしていた頃、今でも忘れられない出来事がある。少し長くなるが紹介したい。

日本で初めて FM 波が送出されたのは NHK で、1957 年 12 月 24 日 19 時だそうだ。場所は東京地区で音はモノラル。全国放送の開始は、この 12 年後の 1969 年 3 月 1 日。当時 NHK の本局 (東京) は日本電信電話公社の放送線を使って全国の放送局と繋がっていた。しかし、これがステレオに対応した設備では無かったため、ニュースなどのモノラル生放送を除き、ステレオ番組については、本局で制作した番組をオープンリール式 2 トラック 19 cm/s のテープに録音し、札幌、仙台、名古屋、金沢、大阪、広島、松山、福岡の各統括局に送り、それを各統括局で再生した音を、FM 波で家庭向けにステレオ放送していた。

統括局管下の地域放送局 (私が住んでいた山口県等) は統括局 (広島) からの FM 波を受信・中継し、地域内に FM 波で放送していた。これらの仕組みについては、リスナーのほとんどが知らなかったが、ある特別番組の放送で全国のリスナーが知ることになる。

1970 年大阪万博の開催期間中、協会主催のクラシック・コンサートが大阪フェスティバルホールで開催された。招聘されたのは世界でも有数の演奏団体であるカラヤン・ベルリンフィル、バーンスタイン・ニューヨークフィル、ジョージセル・クリーヴランド、ベルリン・ドイツ・オペラ、パリ管弦楽団等である。これらの演奏会は、全国のクラシック音楽ファンに大変注目されていた。その公演の中から NHK は FM 波を使って、演奏会場から全国に生中継するという予告をしていた。

生中継というのは、当時としては珍しく、放送を通じてではあるが、あたかも同じ会場で聴いているような“ライブ感”があり、期待された。初回の中継で選ばれたのはベルリン・ドイツ・オペラでワーグナーの歌劇「ローエングリン」だった。当日、全国のリスナーは固唾を呑む思いで受信機の前で放送を待っていた。定刻に演奏会場からの生中継が始まったが、リスナーの期待感は一瞬にして落胆に変わってしまった。何故なら、受信機から聞こえて来た音がステレオでは無くモノラルだったからだ。

ステレオで放送されたのは演奏会場のある大阪統括局管内のみで、それ以外の地域は東京を含め、前述した回線ネックによりモノラル放送となったのだ。放送中に問い合わせがあったのか、幕間の休憩時間にアナウンサーが「本日のプログラムは後日ステレオで再放送します」と繰り返しアナウンスしていた。

その後、注目演奏家の生中継はリスナーから期待されながらも、NHKは消極的だった。この問題が解決したのは9年後の1979年、電電公社がFMステレオ放送用のPCMデジタル回線を全国に整備したことで、ようやく解消されたのである。もちろん、統括局によるステレオ番組のテープ再生方式も終了した。

5. 究極の表現力を発揮する楽器「オーケストラ」

様々な音楽を聴くようになって、室内楽や器楽曲も聴いたが、何か物足りなさを感じるようになり、次第にオーケストラに惹かれていった。

オーケストラは弦楽器、管楽器、打楽器といった様々な楽器を演奏する人たちの合奏集団で、ステージに100人以上の演奏者が出演することもある。

多彩な楽器の音色の持ち味を生かした上に、巧みな音色の組み合わせによるアンサンブルで作品が表現される。

例えばオーボエとフルートが同じメロディーを重ねて演奏すると、それぞれの楽器の音とは全く異なる音色が作り出される。楽器の組み合わせは無限に近く、表現力も豊かになる。

指揮者でピアニストでもあるウォルフガング・サヴァリッシュがN響とベートーヴェンの交響曲チクルスを行い、その演奏がテレビで放送された際の解説で次のように語っていた。

「運命の第4楽章の展開は ”苦悩の末に勝ち取る勝利“ を表現したものだ。曲の後半のクライマックスの部分では、音の迫力や輝きを増すために、交響曲史上初めてピッコロやコントラファゴット、トロンボーンといった楽器が加えられ、大きな効果を発揮する。」と言って、その部分をピアノで演奏し始めたが、直ぐに弾くのを止めて「ここは、ピアノの様な楽器ではとても表現することが出来ない。オーケストラの表現力が必要だ」と語ったことが印象的だった。

6. オーケストラとホールの関係

20代、幸いにも東京でN響や来日したオーケストラの演奏を聴く機会があった。今は他界してしまったベームやムラヴィンスキー、カラヤン等の演奏会では、聴衆の期待感からか、客席がいつもと違ってザワザワとした雰囲気があった。勿論、巨匠たちは期待に応える素晴らしい演奏を披露してくれた。

生の演奏とレコード等の再生音が大きく異なると感じたのは、弦楽器群の音である。ソロの音ではあまり違いを感じないのに、複数の楽器で演奏される音は極めて柔らかく、温かい響きで幅を感じる。馬の毛を擦る弓から発せられる音は録音が難しいのだろうか。勿論、ダイナミックレンジの広さや床から体に伝わってくるホルンやコントラバス、ティンパニ等の低音も生だからこそ豊かに響いた。

一方で、サントリーホールでは聴く位置が中央から離れると楽器の直接音と残響のバランスが崩れて、楽器の定位感が失われて音がぼやけてしまう様に感じた。生演奏でも最適なポジションで聴かなければ音の響き方で満足出来ないことが分かった。

新婚旅行でウィーンを訪ねた際、楽友協会ホールでウィーン交響楽団のブルックナーの交響曲を聴いた。このホールの残響は豊かなのに各楽器の直接音が、後方の客席でも確実に伝わってくる。サントリーホールと同様に客席数は 2,000 席だが、ホールの形状が異なるためか、音のバランスは良かった。

7. オーケストラの音を再生するには・・・

クラシックの演奏会では、拡声器やマイク、アンプ等は使わないのが普通である。従って再生装置を通して聞く音も演奏会場と同じ環境だったら、「生演奏」と「再生音」に大きな差を感じないかもしれない。

(厳密には、スピーカーと生楽器では指向性などの空間的特性が違うらしい)
しかし、コンサートホール並みの環境を自宅に用意することは難しい。

一般家庭の環境ではピアノ等の器楽曲の再生音は、生と同じ音量にして聴くことは可能だとも思われる。しかし、オーケストラとなると、生演奏と同一の音量は不可能である。

若い頃にソフトドームユニットを中高域に搭載し、自然な音場再現が特徴と言われたビクターの SX シリーズを買って、音量を下げてオーケストラを聴いていた時期があったが、やはり音の迫力が不足し、生演奏とは別物で違和感があった。

8. ヘッドホン

現役時代、通勤に 1 時間を要していたため、その間はヘッドホンで音楽を楽しんでいた。当時は国内メーカーのヘッドホンに拘って何種類か使っていたが、音質的にはロックやジャズ向きのもが多く、オーケストラの音の再現には適していなかった。



ところが、ある日の昼休み、会社の近くの電器店でヘッドホンの視聴会をやっていると聞いて、あまり期待せずに行ってみた。

いつも使っているウォークマンを持参し、聞きなれた曲を次々とかけて聴き比べた。

納得する音との遭遇は出来ず、諦めかけたその時、突然、いつもの曲が今までと全く異なるスッキリとした音で聴こえた。それは探し続けていた生演奏に近い音だった。

「探していたものが見つかった！」まさに雷にでも打たれたような衝撃であった。

ヘッドホンのメーカーはBOSE。スピーカーのメーカーとしての認識はあったが、ヘッドホンを製造しているとは知らなかった。型番は QuietComfort 35 wireless headphones

その音については、①音の作りが原音に忠実でクリアな感じ（近年のBOSEの音の特徴らしい） ②低音は自然な迫力で全体のバランスが良い ③ノイズキャンセリングの効果で、最弱音が続く楽曲でも、静寂の中で集中して聴くことが出来る ④イコライザーに

より絶妙にチューンされて長時間聴いても疲れな音質である。その音はクラシックやPOPSに適している。一方で、ジャズなどでは物足りなさを感じるかと思われる。

ヘッドホンはスピーカー程の音の立体感やリアリティは無いものの、音源の左右チャンネルの分離が良く、空間的な表現力もあり遮音性に優れているため音楽に集中できるところが優れている。

このヘッドホンとの出会いは恋人と出逢うような奇跡だった。今日も私に至福の時間を提供してくれている。これからの私の人生に欠かせない存在となった。

9.感謝

今回の「つれづれの記」で、クラシック音楽と出会ってから現在までの私とオーディオ機器との関りを振り返ってみたが、いつの時代も興味が尽きない魅力的な製品との出会いがあった。

今まであまり考えたことが無かったが、これらの優れた製品をコツコツと研究開発して世に送り出してくれた関係業界の技術者の皆さんに感謝の言葉を述べたい。

皆様のお陰様で、私をはじめ多くの人たちの人生が豊かになり、それが明日への生きる力となりました。来たる子供たちや孫の時代にも、その伝統や技術力が継承され、永遠に続いて行って欲しいと願っています。ありがとうございました。



以上



我孫子オーディオファンクラブ <http://www.aafc.jp/> 2022年3月号
編集責任者 鈴木 道郎/校正 大久保 貴枝子